

## 学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	須賀 真以子 【国際日本学専攻 平成17年度生】	本論は、一九六〇年代から八〇年代にかけて活躍した中上健次について、その書記行為の目的と戦略について詳細に分析し、論じた大変意欲的な論考である。論の骨格となった研究は既に「昭和文学研究」などの権威ある学会誌に発表され、学会でも既に高い評価を受けているものである。中上は紀州新宮という大逆事件の舞台の被差別部落出身であり、その文学的な書記行為は、六〇年代以降に世界的に流行したポストモダニズム理論に基づき、支配/被支配を形作るイデオロギーを、言語や物語が内包する権力に置き換えてそれを脱構築することであった。中上の場合、それは「空洞/うつほ」の概念に集約される。これは中心（本質）を持たずに強力な磁力によって権力構造を反転させる場（物語る力）のことである。須賀氏は中上の評論や発言などから、この「うつほ」を三つの相にわけて論じた。第一は、情報操作による決定不可能性の追究という語りにおける「うつほ」で、日本語で小説を書くことへの疑義を表明した各種テキストを分析した。第二に、古典の『宇津保物語』の脱構築として書かれた中上の『宇津保物語』などから、被差別部落の「路地」を視座に、京都と熊野という中心と周縁のトポスを巡る反転と脱構築、「路地」の聖性化の戦略を分析した。第三に、故郷新宮の「路地」の解体以後の中上における「物語る」ことによる不決定性の試みを、複雑な語りの視点や語り手の恣意性、語る「私」の相対化などから分析し、中上の直面した困難を分析した。審査委員会は1月8日の第2回の審査で、まとめの部分が充分書きこまれていない、『宇津保物語』に関しての理解が不十分かつ先行研究への配慮が不足している、第三部第三章の吉増剛造を論じることの関連性が不十分であるといった問題点が指摘された。須賀氏は短時間にこれらの課題を克服し、2月17日の第3回審査では、修正された論文が上記のすべての課題をクリアしたと高く評価された。論文の内容自体はもともと高度で、文学理論や同時代の文学状況の知見に優れ、またテキストの分析方法も熟達したもので説得力があり、学力、知識共に博士号取得に十分なものと判断された。学位論文公開発表会は2月17日に行われ、研究の意義や新しさ、採用した方法や、各章の論点と結論、まとめや課題などを要領よくまとめて発表した。質問に対しても必要充分に回答した。最終的に、研究の意義、方法、具体的な分析の妥当性、論全体の構成など、学位論文として十分な内容であると判断され、本論文を博士(人文科学)、PH.D. in Japanese Literature の学位にふさわしいものと判断し、合格とした。
論文題目	中上健次の言語戦略 —「物語」における「空洞/うつほ」概念—	
審査委員	(主査) 教授 大塚常樹	
	准教授 谷口幸代	
	教授 高島元洋	
	教授 中村俊直	
インターネット公表	准教授 松岡智之	
	○ 学位論文の全文公表の可否 ( 可 ・ 否 ) ○ 「否」の場合の理由 ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ㊦. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について	